

学歴に関する社会イメージと子供に対する教育期待

山 口 洋

Images of Credential Society and Expected Levels of Child's Education

Yoh YAMAGUCHI

目次

1. 本稿の目的
2. 先行研究と本稿の射程
 - 2.1 学歴に関する社会イメージと教育期待について
 - 2.2 学歴に関する社会イメージの形成過程について
3. 調査と主な質問項目
4. 学歴に関する社会イメージと教育期待との関係
 - 4.1 仮説
 - 4.2 仮説の検証
5. 学歴に関する社会イメージの形成過程
 - 5.1 仮説
 - 5.2 仮説の検証
6. 補論：社会的属性別の教育期待・社会イメージの違いについて
7. 結論

1. 本稿の目的

近年、日本における教育熱は、ますます高まりつつあるようだ。大学・短大進学率はしばらく横這い状態が続いていたが、1990年代に入って再び上昇し1992年に過去最高の38.9%を記録、1995年には45.2%に達した（文部省 1996）。また、この二十年弱の間に小学生の通塾率は約二倍に増大し、小学生の約四人に一人は学習塾に通うようになった（総合研究開発機構 1996）。また、家計に占める教育費の割合も、この二十年ほどで約二倍になっている（総合研究開発機構 1996）。

こうした教育熱に関して古くからよく耳にする言説は、「日本は学歴社会であるとの“イ

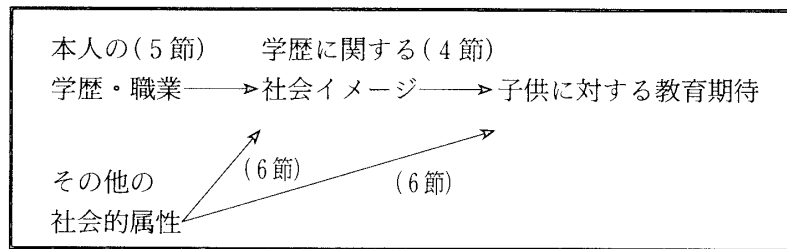


図1 本稿の作業 (説明項→被説明項)

メージ”(虚実はともかく)が、子供に対する教育期待をあおっている」というものである。しかし、こうした学歴に関する社会イメージが教育期待とどう関わっているのかについて、実際に質問紙調査等で確かめた研究は意外に少ない。

そこで本稿では質問紙調査のデータから、人々の学歴に関する社会イメージ（以下「社会イメージ」と略）と子供に対する教育期待との関係を明らかにする（4節）。また、本人の職業・学歴と社会イメージとの関連を分析することを通じて、社会イメージの形成過程について明らかにする（5節）。また6節では補論として、4節～5節で扱わなかった社会的属性をとりあげ、属性別の教育期待・社会イメージの違いについて明らかにする。

2. 先行研究と本稿の射程

2.1 学歴に関する社会イメージと教育期待について

人々の学歴に関する社会イメージと、教育アスピレーションおよび教育期待との関係が問題とされるようになったきっかけは、1980年前後に登場した「学歴社会虚像論」であった。小池・渡辺（1979）は、Dore（1978）の所説に導かれつつ、高学歴化に伴う学歴の社会経済的効用の低下（大卒高卒間の賃金格差、昇進格差の縮小など）を指摘し、「日本は学歴社会である」という古くからの一般的認識は今や「虚像」とであると論じた。その後の研究でも、小池らの論旨は裏付けられており、日本における学歴の社会経済的効用の低下傾向（藤田 1983）、あるいは、諸外国に比べての効用の低さ（石田 1989）が指摘され続けている。

ここから、学歴の社会経済的効用は低下しているのに、人々がますます学歴を求めるようになるという一見パラドキシカルな現象が、説明課題として浮上してきた（岩田 1981）。岩田（1981）は、この現象を説明するいくつかの説を検討する中で、能力証明説、能力アイデンティティーの確立説が特に有力だと論じている⁽¹⁾。

能力証明説とは、進学競争への参加者が増加するにつれて、学歴が能力証明の意味を付与され、こうした証明を求めて教育熱が高まるという議論である。また、能力アイデンティティーの確立説とは、社会的役割分担の複雑化にともない、若者たちは社会に出る前に、

自分の能力の質やレベルを自分自身に確認させる必要が生じてくるが、そうした確認の手段として進学競争が利用されるというものである。

要するに岩田（1981）は、社会経済的効用と結びついた古い学歴イメージに人々が踊らされているとする仮説を否定し、「能力」と結びついた新しい学歴イメージによって進学熱が生み出されているという仮説を提示したことになる。ただし、岩田（1981）は意識調査等による実証は行っていない。

岩田（1981）の他にも、人々の学歴イメージと教育アスピレーション・教育期待との関連について、いくつもの仮説が提示されているが（例えば竹内 1981、薬師院 1995）、質問紙調査等による実証は行われていない。学歴に関する社会イメージをとりあげた実証研究そのものは、様々な分野で繰り返されてきている（新堀（編）1966、今津 1978、石川・川崎（編）1991、山口 1993、山本（編）1994、竹内 1995）。しかし、それらは意外にも、一連の教育アスピレーション・教育期待の研究（中山・小島 1979、宮島・田中 1984、武井・木村 1992、片瀬・土場 1994）と結び付けられてこなかった。

最近のわずかな例外として、阿部（1996）の研究が、高校生の親を調査対象に、出世条件としての学歴の重要性イメージと教育期待との関係を扱っている。しかしここでは、岩田（1981）らが強調したような、学歴と能力との関連性については扱われていない。

そこで本稿では、従来から扱われてきた「社会的成功にとって重要なのは学歴なのか能力／努力なのか」という点のイメージに加えて、「学歴と（仕事上の）能力／努力とは関連するのか」という点のイメージを取り上げる。

このねらいを図式化したのが図2である⁽²⁾。岩田（1981）の説によれば、高学歴化が進んだ現在、人々の教育熱と深いかわりを持つのは図2のaのイメージではなく、むしろcのイメージである。そして、学歴が仕事上の能力や努力と関連すると考える人々にとっては、学歴主義は業績主義の理念によって正当化されることになり、子供に対する教育期待に一層の拍車がかかるのではないと思われる。

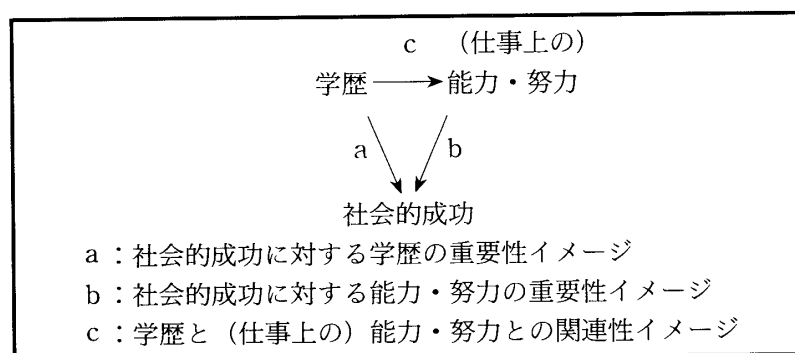


図2 人々の学歴に関する社会イメージの構造(→は規定関係)

2.2 学歴に関する社会イメージの形成過程について

学歴に関する社会イメージが形成されるプロセスは多岐にわたることが予想され、本稿でその全てを検討することはできない。そこで、先行研究を参考にしながら、社会イメージの形成にかかわる主な社会的領域を列挙し、本稿で扱う領域を限定しておこう。

まず第一に、本人の所属階層・出身階層⁽³⁾の影響が考えられ、既に職業生活や学歴による社会イメージの違いが、報告されている（新堀(編)1966、今津 1978、山口 1993、阿部 1996）。ただし、わずかな例外（新堀(編)1966）の他は、学歴と仕事上の能力・努力との関連性イメージを扱っていない⁽⁴⁾。第二に、子供の学校生活（塾などを含む）⁽⁵⁾の影響が、子供経由で親の社会イメージに反映されることが考えられる。教師が生徒を受験勉強に駆りたてる際の「後々、やっておいて損はない」といった決まり文句から推察されるように、学校そのものが社会イメージの形成の場となっている可能性は高い。第三に、地域生活において、社会イメージが形成されるというプロセスが考えられる。この領域は子供の学校生活とも密接に結びついている。第四に、マスコミュニケーションの影響が考えられる。「学歴社会虚像論」（小池・渡辺 1979）の流れの中で、「日本は学歴社会である」という言説は、社会の客観的構造を直接は反映しておらず、一種の「神話」として機能している、という議論もなされている（薬師院 1995）。こうした見方からすると、社会イメージの形成過程として、マスコミュニケーションの影響等が考慮されなくてはならない。第五に、家庭生活⁽⁶⁾の影響が考えられる。例えば、親が職業生活から培った社会イメージと、子供が学校生活から培った社会イメージとが、家庭において共鳴し相殺しあいながら、一定の社会イメージが形成されるというプロセス等が考えられる。また、文化的再生産論⁽⁷⁾に基づく研究によれば、教育アスピレーションと家庭の文化的背景との関連が強調されており（武井・木村 1992）、社会イメージとの関連も当然予想される。

以上のうち、本稿5節のデータ分析で扱うのは、主に第一の所属階層の影響のうち、本人の職業と学歴の影響である。ただし、6節の補論で第五の家庭生活の影響についても軽く触れる。その他の領域の影響については本稿では扱うことができない。

3. 調査と主な質問項目

本稿で使用するデータは、1995年10月に石川県金沢市で行われた質問紙による面接調査、「職業と社会生活に関する意識調査」⁽⁸⁾によるものである。調査対象者は、金沢市⁽⁹⁾在住の満60才未満の有権者から、400名が確率比例抽出（20投票区で20名ずつ）により選ばれた。回収率は67.5%（270名、男性118名、女性152名）である。

ここで、本稿の分析で主に用いる変数について説明しておこう。

まず、子供に対する教育期待を示す変数として「教育重視度」と「期待水準」という二

つの変数を用いる。前者は「子供に高い教育を受けさせること」を生活上どの程度重視するかにかかわり、後者は「大学まで」「大学院まで」といった具体的な期待水準である⁽¹⁰⁾。

質問項目、得点の与え方、単純集計結果はそれぞれ表1、表2に記してある。「教育重視度」「期待水準」ともに得点が高いほど教育期待が高いことを表す。ちなみに、両変数の間の相関は、ピアソンの積率相関係数で.331 (1%有意) という程度であり、二つの変数が密接に関連しつつも相互に独立した意味を持っていることがうかがえる。

学歴に関する社会イメージとしては、次の5つの変数を採用した。すなわち「社会的成功に対する学歴の重要性イメージ」、同じく「能力の重要性イメージ」「努力の重要性イメージ」、そして「学歴と能力との関連性イメージ」「学歴と努力との関連性イメージ」である。表3、表4でそれぞれ、質問項目、得点の与え方、単純集計結果を示してある。それぞれの変数は得点が高いほど、「重要性」あるいは「関連性」が高いことを示す。

表3をみると、社会的成功にとって能力や努力が重要だとする人が圧倒的に多い。した

表1 教育重視度

あなたの生活で、以下の項目をどの程度重視していますか。(項目6)子供に高い教育を受けさせること(学齢期のお子さんがない方はいるものとしてお答え下さい)		
得点	選択肢	構成比(度数)
5	非常に重視している	3.7
4	重視している	24.1
3	やや重視している	35.9
2	あまり重視していない	27.4
1	重視していない	8.9
計		100.0%(270)

表2 期待水準

[お子さんのいない方はいるものとして、お答えください] あなたは、その *お子さんにどの程度の学歴を希望されますか(希望されていませんか)		
得点(教育年数)	希望学歴	構成比(度数)
18	大学院修了	3.7
16	大学卒業	57.4
14	短期大学・高専卒業	13.7
12	高等学校卒業	20.4
9	中学校卒業	0.7
計		100.0%(258)

* (二人以上子供がいる場合は「最近誕生日を迎えたお子さん」を指定)

表3 社会的成功に対する学歴・能力・努力の重要性イメージ

社会に出て成功するためには、次の(1)～(6)* のような項目について、どのくらい重要だとお考えですか、それぞれ下の選択肢の番号でお答えください。				
得点	選択肢	学歴	能力	努力
		構成比(度数)	構成比(度数)	構成比(度数)
4	重要である	11.1	60.2	83.3
3	やや重要である	48.9	34.9	15.9
2	あまり重要でない	33.3	3.7	0.4
1	重要でない	6.7	1.1	0.4
計		100.0% (270)	100.0% (269)	100.0% (270)

*調査票は(1)能力(2)家柄(3)学歴(4)努力(5)財産(6)運の6項目

表4 学歴と能力・努力との関連性イメージ

		学歴の高い人は、一般に、 仕事の能力が優れている	学歴の高い人は、一般に、 仕事に関して努力家だ
得点	選択肢	構成比(度数)	構成比(度数)
4	そう思う	4.4	4.1
3	だいたいそう思う	21.9	15.9
2	あまりそう思わない	49.6	53.0
1	そう思わない	24.1	27.0
計		100.0% (270)	100.0% (270)

がって、そうした能力や努力と学歴との関連性をどうイメージするかが、その人にとっての学歴の価値を大きく左右するものと予想される。そこで表4をみると、学歴と能力、学歴と努力の関連性について否定的なイメージを持つ人が多いが、全否定(「そう思わない」)する人は全体の4分の1程度に過ぎない。他の人々は程度の差はあれ、学歴と能力、努力との関連性をどこか認めているものと考えられる。この「程度の差」が、その人にとっての学歴の価値の差となり、子供への教育期待に反映されるのではないか。

なお、4節以降の分析で用いる本人学歴、家族収入、本人職業については、表5、表6、表7のようにになっている。他の変数の概要については、6節の表17に示してある。

4. 学歴に関する社会イメージと教育期待との関係

4.1 仮説

ここでは、学歴に関する社会イメージと教育期待との関係を分析する。まず、仮説を提

表5 本人学歴

最終学歴	構成比(度数)
新制大学院	1.9
新制大学	19.3
新制短大・高専	13.0
新制高校	52.6
新制中学校	13.3
計	100.0%(270)

表6 家族収入

平均	784
標準偏差	337
最小値	0
25パーセンタイル	500
50パーセンタイル	700
75パーセンタイル	1000
最大値	2400

(n=252、単位：万円)

表7 本人職業

カテゴリー	構成比(度数)
専門	17.8
管理	10.4
事務	36.1
販売	9.9
熟練	11.9
半熟練	9.9
非熟練	3.0
農業	1.0
計	100.0%(205)

示しておこう。

- ①社会的成功にとって学歴が重要だと思ふ人ほど子供に対する教育期待が高い。
- ②社会的成功にとって能力が重要だと思ふ人ほど子供に対する教育期待が高い。
- ③社会的成功にとって努力が重要だと思ふ人ほど子供に対する教育期待が高い。
- ④学歴と仕事上の能力とが関連すると思ふ人ほど子供に対する教育期待が高い。
- ⑤学歴と仕事上の努力とが関連すると思ふ人ほど子供に対する教育期待が高い。

このうち①は古くから言われてきた「日本は学歴社会であるとの“イメージ”が、子供に対する教育期待をあおっている」という言説に対応している。一方、②～⑤が本稿の仮説である。2.1節で述べた岩田(1981)の「能力証明説」「能力アイデンティティの確立説」に基づくならば、特に②と④が有力ではないかと考えられる。

4.2 仮説の検証

まず、教育重視度について①～⑤の仮説を検証する。表8は、教育重視度に対する社会イメージおよび本人の学歴(教育年数)・職業威信⁽¹¹⁾、家族収入の効果を示したものである。相関係数(r)と連関の尺度(γ , τ_c)をみるかぎり、①②④の仮説が有力のようである。すなわち、①社会的成功のために学歴が重要だと思ふ人ほど、②同じく能力が重要だと思ふ人ほど、また④学歴と仕事の能力が関連すると思ふ人ほど、「子供に高い教育を受けさせること」を重要視している。また、家族の収入が高い人ほど、子供の教育を重要視するという傾向もみられた(このことの解釈は第6節参照)。

表8の β は、積率相関係数(r)が5%水準で有意なものを説明変数として、重回帰分析を行ったときの結果(標準回帰係数)を示す。注目したいのは、①の「学歴の重要性イメージ」の効果が有意でなくなることである。つまり他の変数を一定とすると、成功にとって学歴がいくら重要だと思っても子供の教育を重視する態度には結びつかない。

表 8 教育重視度に対する社会イメージと社会経済的背景の効果 (全サンプル n=270)

説明変数	教育重視度に対する効果			
	r	β	γ	τ_c
①学歴の重要性イメージ	.159***	.056	.210	.130
②能力の重要性 //	.191***	.154**	.295	.147
③努力の重要性 //	.049	—	.083	.022
④学歴と能力との関連 //	.272***	.228***	.354	.227
⑤学歴と努力との関連 //	.101*	—	.164	.100
本人学歴 (教育年数)	.079	—	.108	.065
本人職業威信	.020	—	-.010	-.008
家族収入	.178***	.192***	.162	.141
決定係数	.131			

[r:ピアソンの積率相関係数 β :標準偏回帰係数 ***1%有意 **5%有意 *10%有意] γ :ガンマ係数 τ_c :スチュアートの順位相関係数

<p>+ (仕事の)</p> <p>学歴 → 能力</p> <p>イ</p> <p>+ +</p> <p>社会的成功</p> <p>3.31 (36)</p>	<p>+ (仕事の)</p> <p>学歴 → 能力</p> <p>ロ</p> <p>+ 0</p> <p>社会的成功</p> <p>3.06 (17)</p>	<p>0 (仕事の)</p> <p>学歴 → 能力</p> <p>ハ</p> <p>+ +</p> <p>社会的成功</p> <p>3.04 (73)</p>	<p>0 (仕事の)</p> <p>学歴 → 能力</p> <p>ニ</p> <p>+ 0</p> <p>社会的成功</p> <p>2.47 (36)</p>
<p>0 (仕事の)</p> <p>学歴 → 能力</p> <p>ホ</p> <p>0 +</p> <p>社会的成功</p> <p>3.12 (8)</p>	<p>0 (仕事の)</p> <p>学歴 → 能力</p> <p>ヘ</p> <p>0 0</p> <p>社会的成功</p> <p>2.60 (10)</p>	<p>0 (仕事の)</p> <p>学歴 → 能力</p> <p>ト</p> <p>0 +</p> <p>社会的成功</p> <p>2.80 (45)</p>	<p>0 (仕事の)</p> <p>学歴 → 能力</p> <p>チ</p> <p>0 0</p> <p>社会的成功</p> <p>2.56 (44)</p>

図 3 学歴に関する社会イメージの 8 類型と教育重視度

* 学歴→能力は「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」を+、学歴→成功は「重要である」「やや重要である」を+、能力→成功は「重要である」のみを+とした。小数点の数値は教育重視度の平均値を、()内数値は度数を示す。

この点をより詳しく分析するために図 3 を見てみよう。ここでは、「学歴」「能力」「社会的成功」に関する社会イメージを 8 つのタイプに分けてみた。図中の+はその矢印で示された関連性を(比較的)認めていることを示す。同じく 0 (ゼロ) は認めていないことを示す。それぞれのタイプを示す図形の下の数値は、教育重視度の平均値を示す⁽¹²⁾。()内の数値は度数である。

タイプ [イ] と [ホ] は「能力主義的学歴社会像」とも言うべきものである。これらの

タイプでは、学歴が能力を経由して社会的成功に影響を与えているからである。こうしたタイプの社会イメージを持つ人々は、教育重視度が最も高い。それに対してタイプ〔二〕は、「属性主義的学歴社会像⁽¹³⁾」とも言うべきもので、学歴が能力とは無関係に社会的成功に直接影響する、というイメージである。このタイプのイメージを持つ人々の教育重視度は最も低くなっている。すなわち、子供の教育を重視する態度と結びつくのは、能力主義的な学歴社会のイメージである。逆に属性主義的な学歴社会のイメージを持つ人は、子供の教育を必ずしも重視しない。

能力主義的な学歴社会像を描く人々は、学歴主義を道徳的⁽¹⁴⁾に正当化することができ、子供に高い教育を受けさせる自分も正当化することができる。それに対して、属性主義的な学歴社会像を描く人々は、学歴主義を道徳的に正当化できず、子供の教育に積極的になれないのではないか。

次に期待水準について①～⑤の仮説を検証しよう。期待水準の質問項目の性質上、(質問対象の)子供が既に学校を卒業してしまった人を除いて分析する。表9をみると、全体に相関・連関は低いものの、仮説④がある程度有効であるとわかる。また学歴⁽¹⁵⁾が高い人ほど、また家族の収入が高い人ほど、子供に期待する教育の水準が高いという傾向がみられた。これは様々な調査で既に明らかにされてきたことである。重回帰分析の結果(β)をみると、仮説④は、学歴および家族収入のレベルを一定としたときにも成り立っていることがわかる。

それでは仮説①～⑤の検証結果を箇条書きでまとめておこう。○が検証されたもの、△が弱い検証、×が検証されなかったものである。仮説④はおおむね検証されたと言えるが、

表9 期待水準に対する社会イメージと社会経済的背景の効果
(子供が既に学校を卒業してしまった人を除く n=207)

説明変数	期待水準に対する効果			
	r	β	γ	τ_c
①学歴の重要性イメージ	.069	——	.056	.027
②能力の重要性 //	-.053	——	.064	-.024
③努力の重要性 //	.121	——	.173	.041
④学歴と能力との関連 //	.164**	.202***	.231	.110
⑤学歴と努力との関連 //	-.046	——	-.076	-.037
本人学歴(教育年数)	.188***	.158**	.282	.140
本人職業威信	.067	——	.072	.051
家族収入	.158**	.152**	.169	.124
決定係数		.086		

[r:ピアソンの積率相関係数 β :標準偏回帰係数 ***1%有意 **5%有意 *10%有意] γ :ガンマ係数 τ_c :スチュアートの順位相関係数

仮説①と②は教育重視度でのみ有効であった。③⑤は有効ではなかった。つまり、努力に関する社会イメージは教育期待との関係がほとんどみられなかった。そこで、紙幅の都合上、努力に関する社会イメージは、以下の分析では取り扱わないこととする。

△①社会的成功にとって学歴が重要だと思う人ほど子供に対する教育期待が高い。

△②社会的成功にとって能力が重要だと思う人ほど子供に対する教育期待が高い。

×③社会的成功にとって努力が重要だと思う人ほど子供に対する教育期待が高い。

○④学歴と仕事上の能力とが関連すると思う人ほど子供に対する教育期待が高い。

×⑤学歴と仕事上の努力とが関連すると思う人ほど子供に対する教育期待が高い。

5. 学歴に関する社会イメージの形成過程

5.1 仮 説

ここでは、本人の学歴・職業威信による社会イメージの違いを分析することを通じて、社会イメージが形成される社会心理的なプロセスについて考察する。

学歴に関する社会イメージの形成過程については、過去の研究によって様々な説明がなされてきたが（新堀（編）1966、山口 1993、阿部 1996など参照）、諸説の「最大公約数」を敢えて求めれば「自己正当化説」というべき仮説に集約できよう。これを基本仮説1として明記しておこう。

基本仮説1：自己正当化説

能力主義の理念が浸透した社会のメンバーは、自分自身の社会的成功の原因は能力にもとめ、社会的不成功の原因は能力以外の要因にもとめて、自己を正当化しようとする。そして、その因果関係を社会イメージとして一般化する。したがって、社会的に成功している人ほど、社会的成功にとって能力が重要だと考え、成功していない人ほど、成功にとって能力以外の要因（学歴など）が重要だと考える。

本人の社会的成功の度合いを、職業威信で操作化すれば、基本仮説1から、次の⑥⑦のような作業仮説がたてられよう。それぞれ下の図4のaとbのイメージを説明するものである。

* 基本仮説1の作業仮説

イメージaについて

⑥職業威信の高い人ほど、社会的成功にとって学歴が重要だと考えにくい。

イメージbについて

⑦職業威信の高い人ほど、社会的成功にとって能力が重要だと考えやすい。

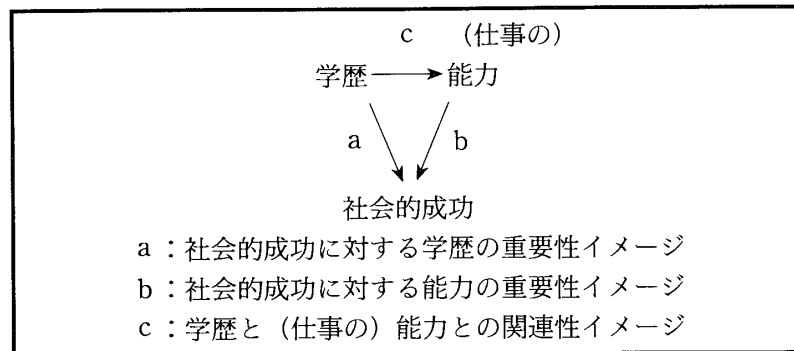


図4 人々の学歴に関する社会イメージの構造(→は規定関係)

これらの仮説は、従来の調査データではある程度検証済であるが、イメージcについては何も語ってくれない。そこで拙稿(山口 1993)の仮説を一部改めて、次のような仮説を新たにたててみたい。

基本仮説2：自己経験の一般化説(本稿の仮説)

人々は自分自身の学歴、社会的成功の度合い、能力(自己評価)のレベルを矛盾なく説明できるような社会イメージを描きやすい。

例えば、自分の仕事の能力に自信を持っていて、社会的に成功した人がいたとする。この人の境遇を矛盾なく説明しうるのは、「社会的成功のためには能力が重要だ」とする社会イメージである。一方、自分の仕事の能力には自信を持っているが、社会的に成功しているとはいえない場合、その境遇を矛盾なく説明できるのは、「社会的成功のためには能力は重要ではない」とする社会イメージである。また、自分の仕事の能力に自信のない人がいたとする。その人の学歴が高かったとすると、この人の境遇を矛盾なく説明できるのは「学歴と仕事の能力は関連しない」という社会イメージである。

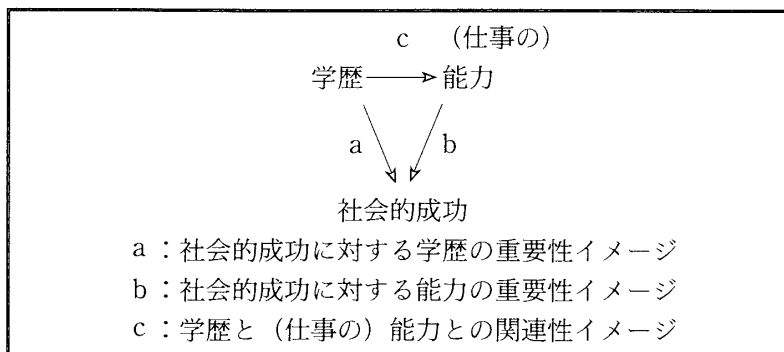
人々は、上の例のような自分自身を矛盾なく説明してくれる社会イメージを抱きやすいであろう。すなわち、自分の学歴、社会的成功、能力、それぞれのレベルが一致すれば、社会一般に学歴、社会的成功、能力それぞれの間に関連があるとみなされ、不一致であれば、関連がないとみなされる。したがって、本人の学歴、社会的成功、能力それぞれのレベルの一致度(不一致度)が、社会イメージの説明変数となる。

この基本仮説2の操作化の仕方は幾つか考えられるが、ここでは次のような操作化を行った。まず、「学歴」を教育年数で、「社会的成功」を本人の職業威信で、「能力」を能力の自己評価(表10参照)で操作化し、それぞれを[高][低]にカテゴリー化した。そして、例えば、能力の自己評価[高]のグループでは、職業威信が高ければ高いほど、能力と職

表10 能力の自己評価（仕事を持っている人のみを集計 n=206）

あなたご自身についておうかがいします。それぞれ下の選択肢の番号でお答えください。 (eの場合) 現在、仕事をお持ちの方にのみ、おうかがいします。					
	a 先を見通して計画的に仕事を進めてゆく方である	b 集中力があり、ミスの少ない仕事をする方である	c テキパキとすばやく仕事をこなしてゆく方である	d 自分なりの創意工夫を活かしながら仕事をする方である	e 仕事に必要な技術や知識は一通り身につけているつもりである
得点 選択肢	構成比	構成比	構成比	構成比	構成比
4 あてはまる	21.4	18.9	26.2	26.2	37.4
3 だいたいあてはまる	59.9	53.9	50.0	50.5	45.6
2 あまりあてはまらない	18.9	23.8	21.4	20.9	14.6
1 あてはまらない	7.8	3.4	2.4	2.4	2.4
計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

自己評価得点 = a + b + c + d + e 能力の自己評価[高]：得点 ≥ 16、[低]：得点 ≤ 15



再掲図4 人々の学歴に関する社会イメージの構造(→は規定関係)

業威信の「一致度」が高いとみなし、能力の自己評価[低]のグループでは職業威信が高いほど、能力と職業威信の「不一致度」が高いものと考えた。この「一致度」が高ければ高いほど、社会的成功にとって能力が重要だと考え、「不一致度」が高ければ高いほど、能力が重要だとは考えないものと予測した。学歴と能力との一致度、学歴と職業威信との一致度についても同様の操作化を行った。

こうして、本人の学歴・職業威信と社会イメージとの関係について、以下の⑧～⑬の作業仮説がたてられる。⑧と⑧'、⑨と⑨'は同じことを裏から言い換えた形になっている。また、⑧～⑨'、⑩と⑪、⑫と⑬はセットとして考えられるべきであり、セット内の全ての作業仮説が有効であってはいじめて、基本仮説2の裏づけとなる。⑧～⑨'は、先ほど記した⑥に対抗する仮説となっており、⑩⑪は⑦に対抗する仮説になっている。⑫⑬は「学歴と仕事の能力との関連イメージ」を説明する新たな仮説である。

＊基本仮説2の作業仮説

イメージ a に関して：「本人の学歴と職業威信のレベルが一致する人ほど、社会的成功にとって学歴が重要だと考えやすい。」

⑧学歴が高い人の場合、職業威信の高い人ほど、社会的成功にとって学歴が重要だと考えやすい。

⑨学歴が低い人の場合、職業威信の高い人ほど、社会的成功にとって学歴が重要だと考えにくい。

⑧' 職業威信が高い人の場合、学歴の高い人ほど、社会的成功にとって学歴が重要だと考えやすい。

⑨' 職業威信が低い人の場合、学歴の高い人ほど、社会的成功にとって学歴が重要だと考えにくい。

イメージ b に関して：「本人の職業威信と能力の自己評価のレベルが一致する人ほど、社会的成功にとって能力が重要だと考えやすい。」

⑩自己の仕事上の能力レベルを高く評価する人の場合、職業威信が高ければ高いほど、社会的成功にとって能力が重要だと考えやすい。

⑪自己の仕事上の能力レベルを低く評価する人の場合、職業威信が高ければ高いほど、社会的成功にとって能力が重要だと考えにくい。

イメージ c に関して：「本人の学歴と能力の自己評価のレベルが一致する人ほど、学歴と仕事の能力とが関連すると考えやすい」

⑫自己の仕事上の能力レベルを高く評価する人の場合、学歴が高ければ高いほど、学歴と仕事上の能力とが関連すると考えやすい。

⑬自己の仕事上の能力レベルを低く評価する人の場合、学歴が高ければ高いほど、学歴と仕事上の能力とが関連すると考えにくい。

5.2 仮説の検証

では、基本仮説1 (⑥⑦)、基本仮説2 (⑧～⑬) の検証に入ろう。ここでは作業仮説の性質上、職業を持つ人が分析の対象となる。

まず表11から仮説⑥⑦が有効でないことがわかる。本人職業威信は、学歴の重要性イメージとも能力の重要性イメージとも有意な関連がみられない。つまり、我々のデータでは基本仮説1の「自己正当化説」が有効ではない。

次に基本仮説2「自己経験の一般化説」を検証していこう。まず表12から、仮説⑧⑨が有効でないことがわかる。大卒以上の学歴の人でみても、それ以外の人でみても職業威信と学歴の重要性イメージとの間に有意な相関はみられない。表13からは、仮説⑧' ⑨'のうち⑨'だけが有効であるとわかる。まとめていえば、自己経験の一般化説は、学歴の重要

表11 基本仮説1「自己正当化説」：仮説⑥⑦の検証
(ピアソンの積率相関係数)

説明変数	被説明変数	
	⑥学歴の重要性イメージ	⑦能力の重要性イメージ
本人職業威信	-.003	.019

*** 1%有意 ** 5%有意 *10%有意

表12 基本仮説2「自己経験の一般化説」仮説⑧⑨の検証
(ピアソンの積率相関係数)

被説明変数：社会的成功に対する学歴の重要性イメージ		
説明変数	サブグループ	
	⑧本人学歴：高(大卒以上)	⑨本人学歴：低(それ以外)
本人職業威信	.122	.002

*** 1%有意 ** 5%有意 *10%有意

表13 基本仮説2「自己経験の一般化説」仮説⑧'⑨'の検証
(ピアソンの積率相関係数)

被説明変数：社会的成功に対する学歴の重要性イメージ		
説明変数	サブグループ	
	⑧'本人職業威信：高	⑨'本人職業威信：低
本人学歴	-.069	-.210**

*** 1%有意 ** 5%有意 *10%有意 職業威信：高(51.6以上) 低(51.6未満)

表14 基本仮説2「自己経験の一般化説」仮説⑩⑪の検証
(ピアソンの積率相関係数)

被説明変数：社会的成功に対する能力の重要性イメージ		
説明変数	サブグループ	
	⑩能力の自己評価：高	⑪能力の自己評価：低
本人職業威信	.271***	-.162*

*** 1%有意 ** 5%有意 *10%有意

性イメージをうまく説明できていない。

表14からは、仮説⑩⑪がともにある程度有効だとわかる。自分の能力を高く評価している人では、職業威信の高い人ほど社会的成功にとって能力が重要だと認めている(⑩)。ところが、自分の能力を低く評価する人では、職業威信の高い人ほど逆に能力の重要性を認めない傾向がある(⑪)。まとめていえば、職業威信と能力の自己評価とが一致している人

表15 基本仮説2「自己経験の一般化説」仮説⑫⑬の検証
(ピアソンの積率相関係数)

被説明変数：学歴と仕事の能力との関連性イメージ		
説明変数	サブグループ	
	⑫能力の自己評価：高	⑬能力の自己評価：低
本人学歴	.203*	-.192**

*** 1%有意 ** 5%有意 *10%有意

ほど、社会的成功にとって能力が重要だと認め、不一致な人ほど重要だとは認めていない。

表15からは、仮説⑫⑬がともにある程度有効だとわかる。自分の能力を高く評価している人では、学歴が高い人ほど、学歴と能力との関連を肯定しがちである(⑫)。ところが、自分の能力を低く評価している人を見ると、学歴の高い人ほど逆に学歴と能力との関連を否定する傾向がある(⑬)。まとめていえば、自分の学歴のレベルと能力のレベルが一致している人ほど学歴と能力との関連を認め、不一致な人ほど認めない傾向があった。

仮説の検証結果を以下に箇条書きでまとめておく。○が検証されたもの、△が弱い検証、×が検証されなかったものである。学歴に関する社会イメージの形成過程を説明する仮説として、自己正当化説は有効ではなかった。一方、自己経験の一般化説は、部分的に有効であったといえる。しかし、この仮説も、「社会的成功に対する学歴の重要性イメージ」を説明することはできなかった。このことの原因は7節の結論で改めて考察したい。

基本仮説1：「自己正当化説」×

×⑥職業威信の高い人ほど、社会的成功にとって学歴が重要だと考えにくい。

×⑦職業威信の高い人ほど、社会的成功にとって能力が重要だと考えやすい。

基本仮説2：「自己経験の一般化説」△

×⑧～⑨'本人の学歴と職業威信のレベルが一致する人ほど、社会的成功にとって学歴が重要だと考えやすい。

○⑩～⑪本人の職業威信と能力の自己評価のレベルが一致する人ほど、社会的成功にとって能力が重要だと考えやすい。

○⑫～⑬本人の学歴と能力の自己評価のレベルが一致するひとほど、学歴と仕事の能力とが関連すると考えやすい。

6. 補論：社会的属性別の教育期待・社会イメージの違いについて

ここまで、学歴に関する社会イメージと教育期待との関連性(4節)、および、社会イメー

ジに対する本人学歴、本人職業の効果（5節）を分析してきた。興味深い結果もいくつかみられたものの、全体に、関連の度合いはあまり強いものではなかった。特に期待水準については、社会イメージとの関連性が弱く、ここまでの分析から多くのことが明らかになったとは言い難い（4節）。また、社会イメージの形成過程に関しても、本稿の仮説は職業を持たない人の社会イメージが説明できない上、「社会的成功に対する学歴の重要性イメージ」が説明されないまま残されてしまった（5節）。そこで、最後に、ここまで取り上げなかったいくつかの社会的属性を取り上げ、それによって教育期待・社会イメージがどう違うかを概観しておく。

まず表16から、家族収入と社会イメージとの間に有意な関連がないことがわかる。したがって、4節で確認した家族収入と教育期待との正の関連は、社会イメージを媒介にしたものではない。単純に、裕福な家庭ほど教育費用の負担可能性が高いことを意味しているようである。

次に表17を参照されたい。ここには社会的属性別の教育期待・社会イメージの平均値、および分散分析を行った際のF値とその有意水準が示してある。これをみると、本人の職業生活に関する属性の説明力が意外に弱く、本人の家庭生活に関する属性の説明力が強いことがわかる。

本人の従業上の地位、職業、従業先の規模といった変数と、教育期待や社会イメージとの関連性は意外に弱い。期待水準が勤め層で高く自営層で低い、という従来から知られた傾向がここでもみられたものの、勤め層が自営層に比べて特に学歴の価値を高くイメージしているということはなかった。また専門職、管理職で学歴と能力との関連を認めがちな傾向がみられたが、これは弱い傾向であった。また、従業先の規模が1000人以上（官公庁を含む）の人は、学歴と能力との関連性を比較的認める傾向があり、古くからの官僚制組織論と整合する結果となったが、それもごく弱い傾向でしかなかった。

それに対して、「子供の性別」⁽¹⁶⁾「子供の有無」といった本人の家庭生活に関する属性の説明力が強いことがうかがえる。「子供の性別」と期待水準との関連をみると、男の子には女の子よりも高いレベルの学歴が期待されていることがわかる。これは常識でもあり、既に過去の研究で詳しく取り上げられている点である（例えば、片瀬・土場 1994、参照）。

本稿では特に「子供の有無」と社会イメージとの関連に注目したい。表17をみると、子供のいる人はいない人に比べて、「学歴と能力の関連」「社会的成功に対する学歴の重要性」を認めがちであり、また「教育重視度」も高くなっている⁽¹⁷⁾。すなわち、人々は親となって、現実には子供の将来を心配しなくてはならなくなると、「とたんに」学歴の価値を認めはじめる。そして「子供に高い教育を受けさせること」を重要視しはじめる。

表16 家族収入と社会イメージ（ピアスンの積率相関係数）

説明変数	学歴と能力の	成功にとっての重要性イメージ	
	関連性イメージ	能力	学歴
家族収入	-.036	.004	-.082

*** 1%有意 ** 5%有意 *10%有意

表17 教育期待と社会イメージ：属性別の平均点とF値

属性 n=度数	カテゴリー	構成比 %	教育期待		社会イメージ		
			教育 重視度	期待 水準※	学歴と能力 の関連性	成功にとっての重要性 能力	学歴
年齢	20代	25.6	2.51	14.7	1.97	3.49	2.49
	30代	20.7	2.93	14.7	2.14	3.70	2.79
	40代	33.0	2.93	15.5	2.06	3.49	2.66
	50代	20.7	3.13	15.5	2.13	3.54	2.66
n=270	F値		4.58***	3.22**	0.60	1.51	1.57
子供の 有無	無し	31.5	2.64	14.9	1.92	3.51	2.47
	有り	68.5	2.97	15.2	2.14	3.56	2.72
n=270	F値		6.54**	1.46	4.39**	0.43	6.52**
子供の 性別	男	54.7	2.80	15.5	2.01	3.55	2.70
	女	45.3	3.10	14.8	2.29	3.55	2.71
n=172	F値		1.96	5.11**	5.17**	0.01	0.00
従業上 の地位	勤め層	85.4	2.91	15.1	2.07	3.55	2.65
	自営層	14.6	3.00	14.1	1.83	3.50	2.47
n=206	F値		0.18	6.01***	2.52	0.15	1.32
本人 職業#	専門	18.0	3.03	15.2	2.11	3.67	2.69
	管理	10.5	2.95	15.1	2.29	3.50	2.67
	事務	36.5	2.78	15.1	2.08	3.48	2.58
	販売	10.0	3.15	15.1	1.65	3.65	2.55
	労務	25.0	3.00	14.7	2.00	3.52	2.64
n=200	F値		0.76	1.16	2.01*	0.71	0.20
従業先 の規模	0～9人	16.0	2.90	14.4	2.00	3.50	2.57
	10～99人	27.8	3.10	15.1	1.90	3.57	2.60
	100～999人	25.7	2.88	15.0	2.00	3.68	2.26
	1000人～☆	30.5	2.88	15.2	2.26	3.37	2.68
n=187	F値		0.58	1.39	2.21*	2.29*	0.18

※ 子供が学齢期を過ぎているサンプルは除いて集計 *** 1%有意 ** 5%有意 *10%有意

☆ 官公庁を含む # 農業はケースが少なかったため除いて集計、「労務」とは表7の熟練・半熟練・非熟練をまとめたもの

7. 結 論

本稿は、学歴に関する種々の社会イメージが、子供に対する教育期待とどのように結びついているかを分析し(4節)、そうした社会イメージの形成過程について、主に本人の学歴・職業から説明する仮説をたてて検証した(5節)。そして最後に社会的属性別の教育期待・社会イメージの違いについて、補足的な分析を行った(6節)。これらの分析の主な知見とその解釈を結論としてまとめておこう。

(1)学歴と仕事上の能力とが関連すると思う人ほど子供に対する教育期待が高かった。教育期待の指標として「教育重視度(子供に高い教育を受けさせることを生活目標としてどの程度重視するか)」「期待水準(どの段階までの教育を子供に受けさせたいか)」のどちらをとった場合でもこのことが言えた(4節)。この結果は、高学歴化とともに、学歴が「能力」の指標として人々にイメージされるようになり、そのイメージのゆえに教育熱が高まっている、とする岩田(1981)の所説と整合している。

(2)子供に高い教育を受けさせるようとする態度(教育重視度)と結びつくのは、あくまで能力主義的な学歴社会のイメージであり、属性主義的な学歴社会をイメージする人の教育重視度はむしろ低い。学歴が能力と関連し、その能力が社会的成功にとって重要だとする「能力主義的な学歴社会」をイメージする人の教育重視度が最も高く、社会的成功にとって学歴は重要だが能力は重要でなく、学歴と能力とは無関係だとする「属性主義的な学歴社会」をイメージする人の教育重視度が最も低い。学歴を仕事の能力と結びつけて「能力主義的に」イメージすることは、いわば「学歴社会の正当化」を意味し、子供に対する教育期待を高める一つの社会心理的要因となっている。このことは、親の学歴志向が道徳的コミットメントと連動している、という竹内(1981)の所説とも整合している。

また、社会イメージ(教育期待と関連をもったもの)の形成過程については次のような仮説が有望であった。

(3)人々は自分自身の学歴、社会的成功の度合い、能力(自己評価)のレベルを矛盾なく説明できるような社会イメージを描きやすい(自己経験の一般化説)。本稿のデータによれば、本人の職業威信と能力の自己評価のレベルが一致する人ほど、社会的成功にとって能力が重要だと考えやすく、本人の学歴と能力の自己評価のレベルが一致する人ほど、学歴と仕事の能力とが関連すると考えやすかった。ここから「自己経験の一般化」というプロセスが推察される。ただし、「本人の学歴と職業威信のレベルが一致する人ほど、社会的成功にとって学歴が重要だと考えやすい」という傾向はみられなかった。理由としては、学歴や社会的成功についての本人自身のレベル判断と、教育年数や職業威信スコアによる操作化が対応していない可能性が考えられる。能力の「自己評価」を用いた作業仮説だけが有効だったことを考えると、この可能性は大いにありうる。また、基本仮説そのものの間

題として、社会イメージとして一般化されるのが「自己」の経験であるとは限らず、「重要な他者（親、兄弟、配偶者など）」の経験が一般化されることも考えられる。いずれにせよ今後の検討課題として残された。

(4)第6節：補論の分析では、教育期待および社会イメージに対する家庭生活の影響が示唆された。例えば、子供がいる人の方が、いない人よりも学歴の価値を高く評価していた。今後有望なアプローチとしては、本稿で明らかになった職業生活や学歴の影響を含め、「出身階層」「子供の学校生活」「地域生活」「マスコミュニケーション」その他様々な影響を把握した上で、それらが、家庭生活においてどのように調整され、どんな学歴イメージや教育期待が生み出されてくるのかを分析することである。

注

- (1) 岩田が列挙している説は、惰性説、タイムラグ説、エントリー説、社会的圧力説、能力証明説、能力アイデンティティの確立説である。詳しくは、岩田（1981）88-91頁を参照。
- (2) 高学歴化以前の、この種の議論の焦点は、主に図2のaとbの部分に関わるものであった。進路選択が出身家庭の経済的条件に大きく左右されていた時代では、学歴主義は概して能力・努力主義と対立するものと考えられていたため（新堀（編）1966参照）、cのイメージがクローズアップされることはまれだった。
- (3) 教育期待に関しては、職業や学歴によってそのレベルが異なることが既に多くの文献で確かめられている（例えば今津 1978、片瀬・土場 1994、阿部 1996）。
- (4) 新堀（編）（1966）はこの問題を第五章（著者：高旗正人）で扱っている。ただし現在とは時代状況が大きく異なる中での分析であり、また、教育期待と明示的に結び付けられているわけでもない。
- (5) 親の教育期待と子供の学校生活との関連については、片瀬・土場（1994）が、高校生とその親に対する興味深い調査研究を行っている。それによれば、男子生徒の場合、学業成績が親の教育期待に反映されやすいが、女子生徒の場合、反映されにくい。
- (6) 親の教育期待と家庭生活との関連については、片瀬・土場（1994）が、加熱（親の教育期待が子のアスピレーションを上回る場合）・冷却（同じく下回る場合）という概念を使って考察している。
- (7) ブルデューの文化的再生産論の立場から教育アスピレーションの分析が盛んに行われている（宮島・田中 1984、武井・木村 1992など）が、そうした研究の流れと本稿の立場との関係について述べておきたい。宮島（1994）によれば、「いわゆる『能力主義』や『メリトクラシー』の神話への社会学的批判がブルデューの作業の重要な部分をなしている（宮島 1994、87頁）」。学校教育の拡大によってメリトクラシーが実現するという「幻想」は、学歴獲得競争の公平性を前提とするが、ブルデューは「文化資本の継承」という概念で、その公平性を疑ってみせた。にもかかわらず、学歴獲得競争が一見公平な競争に見えるのは、文化資本の継承が様々な「資本の相続継承のうちでも、もっともうまく隠蔽された形式である（Bourdieu 1986（福井訳）、23頁）」ことからきており、ブルデューは自らその隠蔽された形式を暴露しようとしている。こうした意味で、ブルデューの文化的再生産論は、階層社会が能力主義的な社会イメージを被ったまま再生産されてゆく過程を描いているともいえる。従って、文化的再生産論の立場と、能力主義的な社会イメージの浸透を前提とする本稿の立場とは、相反するものではない。
- (8) この調査は、1995年度、金沢大学文学部人間学科の専門科目「社会調査実習」（指導教官：岩本健良助教授、山口洋助手）の一環として行われたものである。

- (9) 金沢市は石川県の県庁所在地で1990年の国勢調査によると、人口452,139人、産業別就業人口割合は第一次産業 2%、第二次産業27%、第三次産業70%である。なお、金沢市の高校の卒業生に占める大学・短大現役進学者の割合は、1994年で45.0%で、男子36.6%、女子54.5%である（金沢市企画調整部統計課(編)1995）。
- (10) 一般に、質問票で子供に対する教育期待を尋ねる場合、「短大まで」「大学まで」といった「期待水準」を尋ねるのが普通である。本稿で「教育重視度」を用いた理由は、次の二点である。①20歳～59歳という幅広い年齢層を対象とする本稿のデータの性質上、教育期待を「期待水準」だけで測定することに危険が伴うこと、②期待水準は、子供が在学中の場合、本人の現在の学力のレベルに左右されやすく（片瀬・土場 1994）、現実的な可能性の追認という意味合いが強いため、親が教育熱心である（あるいは）かどうかという点を必ずしも反映しない場合があること。
- (11) 職業威信スコアは1975年 SSM 調査のものを使用した。本稿の「職業と社会生活に関する意識調査」では、まず職業を「日本標準職業分類」（1986年度版）でコード化し、それを SSM 職業分類(原(編)1993)に再コード化し、職業威信スコアに変換した。
- (12) 教育重視度を、この8タイプの社会イメージで分散分析した結果は $F=3.15$ (1%有意)であった。
- (13) ここでの「属性主義」という表現は、正確に言えば梶田（1981）のいう「業績主義社会の中の属性主義」に対応している。梶田は「業績主義社会の中の属性主義」を「アチーブド・アスクリプション（業績主義の属性主義への転化）」と「アスクライブド・アチーブメント（属性主義に支えられた業績主義）」に分類し、学歴主義を「アチーブド・アスクリプション」の一典型例としている。
- (14) 竹内(1981)は、「親の学歴志向が根強いのは、単にそれが実利的コミットメントの産物にとどまらず、情動的コミットメント、道徳的コミットメントと連動しているからである」（竹内 1981、77頁）と述べる。すなわち、「塾での勉強を含めて進学のための勉強は、しばしば軟弱で依頼心の強い青少年を鍛える人間形成にとって重要な試練、とみなされている。単なる実利にとどまらず、このような意味付与がなされているがゆえに、進学塾のうしろめたさは消去され、教育熱心な親という道徳的理想化も生じるのである」（竹内 1981、76頁）。
- (15) 本人学歴のかわりに「夫学歴」（配偶者のいる人で、女性の場合は夫の学歴を、男性の場合は本人の学歴を採用した変数）を用いると、学歴と期待水準との相関はさらに上がる（.244（1%有意）、 $n=221$ ）。ただし、5節で「本人」学歴を用いた仮説を提示・検討することになるので、本文では本人学歴の効果を記してある。
- (16) 本稿のデータでは、期待水準を尋ねた「当該の」子供の性別しか知ることができない。したがって「当該の」男の子の他に女の子がいるかもしれない、その逆も当然ありうる。「当該の」子供の性別は、期待水準以外にも「学歴と能力との関連性イメージ」に対しても一定の効果を持つようであるが、それがどんな社会学的意味を持っているのか、残念ながら不明である。
- (17) このうち「教育重視度」に関しては、年齢の高い人ほど強くなる傾向もみられることから、子供がいるかないかというよりは、世代間の価値観のギャップの問題と解釈できるかもしれない。しかし、「学歴と能力の関連イメージ」「成功にとっての学歴の重要性イメージ」については、本人の年齢と有意な関連がみられず、子供がいるかないかの違いそのものが重要だと解釈できよう。

参考文献

- 阿部晃士：1996。「高校生と両親の出世観—社会のしくみに関する認知・理念・不公平感」鈴木昭逸・海野道郎・片瀬一男(編)『教育と社会に対する高校生の意識 —第3次調査報告書—』43-58頁。東北大学教育文化研究会。
- Bourdieu, P, 1979, “Les torois etats du capital culturel,” *Actes de la recherche en sciences*, n°30 (福井憲彦訳。1986。「文化資本の三つの姿」『actes』1：18-28頁。日本エディタースクール出版部。)

- Dore, R. P., 1976, *The Diploma Disease*, George Allen & Unwin. (松居弘道訳. 1990. 『学歴社会 新しい文明病』(同時代ライブラリー:37) 岩波書店.)
- 藤田英典. 1983. 「学歴の経済的社会的効用の国際比較」『教育社会学研究』38:76-93頁.
- 原純輔(編). 1993. 『SSM 職業分類(改訂版)』(非売品).
- 今津孝次郎. 1978. 「胎動する教育意識—学歴をめぐる emergent な意識の解明—」『社会学評論』28(4):30-48頁.
- 石田浩. 1989. 「学歴と社会経済的地位の達成—日米英国際比較研究—」『社会学評論』40(3):252-266頁.
- 石川晃弘・川崎嘉元(編). 1991. 『日本社会は平等か 中堅サラリーマンのイメージ』(人文社会叢書-10) サイエンス社.
- 岩田龍子. 1981. 『学歴主義の発展構造』日本評論社.
- 梶田孝道. 1981. 「業績主義社会のなかの属性主義」『社会学評論』32(1):70-87頁.
- 金沢市企画調整部統計課(編). 1995. 『金沢市統計書(平成7年度版)』.
- 片瀬一男・土場学. 1994. 「現代家族における教育アスピレーションの加熱と冷却 —教育は家族内部にどのように浸透しているか—」『社会学研究』61:41-66頁.
- 小池和男・渡辺行郎. 1979. 『学歴社会の虚像』東洋経済新報社.
- 宮島喬. 1994. 『文化的再生産の社会学』藤原書店.
- 宮島喬・田中佑子. 1984. 「女子高校生の進学希望と家族的諸条件 —「文化的」環境を中心として—」『お茶の水女子大学女性文化資料館報』5:41-59頁.
- 文部省. 1996. 『文部統計要覧』平成8年度版.
- 中山慶子・小島秀夫. 1979. 「教育アスピレーションと職業アスピレーション」富永健一(編). 『日本の階層構造』293-328頁. 東京大学出版会.
- 新堀通也(編). 1966. 『学歴 —実力主義を阻むもの—』ダイヤモンド社.
- 総合研究開発機構. 1996. 『学習塾からみた日本の教育』.
- 竹内洋. 1981. 『競争の社会学 —学歴と昇進』世界思想社.
- 竹内洋. 1995. 『日本のメリトクラシー 構造と心性』東京大学出版会.
- 武井慎次・木村邦博. 1992. 「高校生の学歴アスピレーションと階層 —『文化的再生産論』にもとづく考察」『新潟大学人文科学研究』80:1-31頁.
- 薬師院仁志. 1995. 「学歴社会の仮想現実」竹内洋・徳岡秀雄(編)『教育現象の社会学』79-93頁. 世界思想社.
- 山口洋. 1993. 「人々の学歴社会像とその社会的規定要因 —調査データからの理論構築—」『社会学論考』14:61-81頁. 東京都立大学社会学研究会.
- 山本真理子(編). 1994. 『ソーシャルステータスの社会心理学 日米データにみる地位イメージ』サイエンス社.

* 謝辞

本稿の作業は「職業と社会生活に関する意識調査」(1995年10月、於金沢市)に全面的に依存している。全体の指揮にあたった金沢大学文学部人間学科社会学コースの岩本健良助教授、一緒に作業してきた同学科の1995年度「社会調査実習」受講生の皆さん、そして調査に協力して下さった金沢市民の方々一人一人に感謝したい。なお分析段階で、東京都立大学人文学部の高橋和宏教授にご指導頂いた。記して感謝したい。